

# 異界との交通

## —海幸山幸神話を中心に—

兼岡理恵\*

### はじめに—「海」という異界—

本シンポジウムのテーマである「異界」について、『日本国語大辞典 第二版』をみると、「日常生活の場所と時間の外側にある世界。また、ある社会の外にある世界」とある。すなわち、通常とは異なる空間、および時間軸にある世界ということである。

『古事記』『日本書紀』には、高天原、黄泉の国、根の堅州国、葦原中国など、さまざまな世界が登場する。いわゆる海幸山幸神話の舞台となる「海原」も、その一つである。陸上での生活を主とする人間にとって、海は非日常の世界—「異界」であり、それは海における漁撈を生業とする海人にとって、同様であった。とりわけ潜水漁業が怖ろしいものと認識されていたことは、次の『万葉集』の歌からも窺える。

わたつみ  
海神の持てる白玉見まく欲り千度そ告りしかづ潜

きするあま海人は

潜きする海人は告れども海神の心し得ねば見ゆといはなくに

(『万葉集』巻7・1302、1303)

この場合の「(海人が) 告る」行為とは、海人が、漁の安全を海神に祈る呪文とされる。『万葉集』には海人に関する歌が約80首あるが、その中で「告る」という表現が使用されるのは、「潜きする海人」と、潜水する海人について詠われた歌のみである。このように、海での漁を生活の糧

とする海人にとっても、「海神」の支配する「海」は畏怖すべき世界であった。

シンポジウムにおける発表では、このような「海」という異界について、海幸山幸神話を題材として、海への移動方法・手段—交通に注目するとともに、海との「境界」について検討した。本稿では、発表では触れられなかったことを補足しつつ、改めて、古代日本における「異界」との交通、および「境界」について、考察していきたい<sup>1</sup>。

### 1 『古事記』『日本書紀』の海幸山幸神話

#### 1、「海」への移動—山幸彦・ホヨリ—

まず海幸山幸神話について。本話は『古事記』のほか、『日本書紀』正文、一書第一～四にみられ、それぞれ細かい相違はあるものの、その大意はほぼ共通する<sup>2</sup>。以下、『古事記』における同話の概要を示す<sup>3</sup>。

火照命(ホデリノミコト)と火遠理命(ホヨリノミコト)という海幸彦、山幸彦として海山に産物を採る兄弟がいた。ホヨリは兄に頼んで道具を換えてもらったが獲物は何も採れず、その上、兄の鉤を海に失ってしまった。許してもらえないホヨリは、塩椎神の紹介でわたつみの宮を訪ねる。豊玉比売(トヨタマビメ)の従者が水を汲みに来たところをホヨリはその器に御頸の玉を入れて、トヨタマビメのところに献じた。トヨタマビメは奇しいと思って父・海神に報告し、ホヨリは饗応されてトヨタマビメと結婚した。

\*千葉大学准教授

それから三年が経った。ホヨリは大きな嘆息をした。理由を聞かれて海宮にやってきた理由を告げる。そこで海神は魚を呼び集めて尋ねると、すぐに鉤が見つかった。海神はホヨリに塩盈珠、塩乾珠を授け、鉤を返す時の呪言を告げて、兄を苦しめる方法を教えた。兄に鉤を返したホヨリは、海神に教えられた通りにして兄を苦しめ、ついに守護人とならせた。

ホヨリの子を宿したトヨタマビメは子を生むために海辺に上がってきたが、本性の和邇になっている姿を見られたために子を残して帰って行った。生まれた子を天津日高日子波限建鸕草草葺不合命（アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト）という。

ホヨリは、天孫ニニギノミコトと、国つ神・大山津見神の娘、コノハナサクヤビメから生まれた子である。そのホヨリが海神の娘・トヨタマビメと結婚して生まれたウガヤフキアエズの子が、カムヤマトイハレビコノミコト、<sup>のち</sup>後の神武天皇であり、本話は、天つ神—国つ神—海神を結ぶ婚姻関係によって、初代天皇が生まれるまでの背景を語る神話となっている。

さて、ホヨリは「山幸彦」と称されるように、陸での狩猟を得意とするものの、海についての知識は乏しかった。そのホヨリがどのように海に向かったか。『日本書紀』『古事記』を見ると、以下の三つの手段が示されている<sup>4</sup>。

i、船…「無間勝間の小船」（記）、「無目堅間の小船」（紀・一書第三）

ii、籠…「無目籠」（紀・正文）、「大目籠籠」（紀・一書第一）

iii、鰐…「一尋鰐魚」（紀・一書第四）

#### i、船

爾くして、塩椎神の云はく、「我、汝が命の為に善き議を作さむ」といひて、即ち無間勝間の小船を造り、其の船に載せて、教へて曰ひしく「我、其の船を押し流さば、<sup>ややしま</sup>差暫らく往け。<sup>うま</sup>味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往かば、

<sup>いろこ</sup>魚鱗の如く造れる宮室、<sup>わたつみのかみ</sup>其れ綿津見神の宮ぞ。其の神の御門に到らば、傍の井上に湯津香木<sup>かつら</sup>有らむ。故、其の木の上に坐さば、其の海の神の女、見て相議らむぞ」といひき。（『古事記』）

#### ii、籠

老翁の曰さく「復な憂へましそ。吾、汝の為に計らむ」とまをして、乃ち無目籠<sup>まなしかご</sup>を作り、彦火火出見尊を籠の中に内れ、海に沈む。即ち自然に<sup>おのづから</sup>可怜小汀<sup>うましをほま</sup>有り。是に籠を棄てて遊行す。忽に海宮に至りたまふ。（『日本書紀』正文）

#### iii、鰐（ワニ）

老翁が曰さく「復な憂へたまひそ。吾計らむ」とまをす。計りて曰さく「海神の乗る駿馬は八尋鰐なり。是、其の鱗背を立てて、橘之小戸に在り。吾、彼者と共に策らむ」とまをす。乃ち火折尊を将みて、共に往きて見る。是の時に鰐魚策りて曰さく「吾は八日の以後に、方に天孫を海宮に致しまつらむ。唯し我が王の駿馬は一尋鰐魚なり。是、一日の内に必ず致し奉りてむ。故、今し我歸りて、彼をして出来しめむ。彼に乗りて海に入りたまふべし。海に入る時に、海中に自づからに可怜小汀有り。其の汀の随に進でまさば、必ず我が王の宮に至りまさむ……」

（『日本書紀』一書第四）

i～iii、いずれの場合も、ホヨリは「塩椎神」「老翁」の助言により、道具（船・籠）、動物（鰐）の力を借りて、「海」「わたつみの宮（綿津見神の宮、海宮）」に向かう。その道行きも、「味し御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往かば」（『古事記』）とあるように、ホヨリ自身の預かり知らぬ力によって、導かれるままに移動している。また i・ii の船・籠は、海を航海するための道具であるのに対し、iii のワニは動物であり、「海神の駿馬」とあるが、ワニが海神の化身とされていることは、『古事記』におけるトヨタマビメの出産場面や、次の『肥前国風土記』佐嘉郡・佐嘉川条から窺える。

又、この川上に石神あり、名を世田姫と曰ふ。  
海の神 [鱈魚を謂ふ]、年常に、流れに逆へて  
潜き上り、この神の所に至るに、海の底の小魚、  
多に相従ふ。或るは、人、その魚を畏まれば殃  
なく、或は、人、捕り食はば死ぬることあり。  
凡て、この魚等、二三日住まり、還りて海に入る。

またホヨリが、「わたつみの宮」から戻る際にも、  
ワニに乗って帰還している(『古事記』、『日本書紀』  
一書第一、一書第三)。たとえば『古事記』では、  
一日で地上に行けるといふ「一尋わに」に乗って  
帰還するのだが、その際、海神はワニに対して次  
のように述べる。

「若し海中を度らむ時には、(ホヨリを)惶り畏  
らしむること無かれ」とのらして、即ち其のわ  
にの頸に載せて送り出だしき。

ここにも、ホヨリにとって「海」が、恐るべき  
「異界」であることが示されている。

## 2、神威による移動—海神の娘・トヨタマビメ—

一方、海神の娘であるトヨタマビメが、海から  
陸にあらわれる場面は、どのように描かれている  
か。その様子が具体的に示されているのは、『日  
本書紀』正文、同・一書第一である。

豊玉姫、天孫に謂りて曰さく「妾、已に娠め  
り。産まむとき久にあらじ。妾必ず風濤急峻し  
き日を以ちて、海浜に出で到らむ。請はくは、  
我が為に産室を作り、相待ちたまへ」とまをす。  
(中略)後に豊玉姫、果して前期の如く、其の  
女弟、玉依姫を将りて、直に風波を冒して、海  
辺に来到る。(『日本書紀』正文)

「妾已に有身めり。必ず風濤壮けむ日を以ち  
て、海辺に出で到らむ……」(『日本書紀』一書  
第一)

「必ず風濤急峻しき日」(紀・正文)、「必ず風濤壮  
けむ日」(紀・一書第一)と、いずれも風波が激  
しい時にやってくるという。わざわざこのような  
条件の時に到来するのは、海神は風波を操る力を

有しており、その娘であるトヨタマビメの、神威  
を示すための表現といえよう。風波が、海神の靈  
威のあらわれだったことは、ホヨリがわたつみの  
宮から戻る際、海神が、兄・ホデリを懲らしめる  
方法として、「汝の兄、海を渉らむ時に、吾必ず  
迅風・洪濤を起て、其れを没溺れ辛苦めむ」(紀・  
一書第一)、「兄、海に入りて釣せむ時に、天孫、  
海浜に在して、風招を作したまふべし。風招は即  
ち嘯なり。如此せば、吾、瀛風・辺風を起し、奔  
波を以ちて溺し悩さむ」(紀・一書第四)と語っ  
ていることにも示されている。こうした海神の力  
は、『万葉集』巻13・3335でも、次のように詠ま  
れている。

玉梓の 道行き人は あしひきの 山行き 野  
行き にはたづみ 川行き 渡り 鯨魚取り 海  
道に出でて 恐きや 神の渡りは 吹く風も  
和には吹かず 立つ波も 凡には立たず とる  
波の ささふる道を 誰が心 いたはしとかも  
直渡りけむ

同じく巻3・388では、風波を操る力をもつ海神  
を「奇しきもの」と表現している。

海神は 奇しきものか 淡路島 中に立て置き  
て 白波を 伊予に廻ほし…

なお、トヨタマビメの海からの到来表現として、  
『日本書紀』一書第三では、「豊玉姫、自ら大亀に  
馭り、女弟玉依姫を将る、海を光し来到る」と  
ある。「大亀」という動物に乗ってあらわれる点  
が、浦島伝説を彷彿させるが、ここで注目してお  
きたいのは、「海を光し来到る」という表現である。  
これは、神が海から到来する際の常套表現であり、  
『古事記』で、オホクニヌシのもとに大物主神が  
到来する場面や、次に示す『伊勢国風土記』逸文  
における、伊勢津彦という神の出現場面などに見  
られるものである。

天の日別命、問ひて云りたまはく「汝の去く  
時、何を以ちてか駿となさむ」とのりたまふ。  
(伊勢津彦)啓云さく「吾、今夜を以ちて八風  
を起して海水を吹き、波浪に乗りて東に入らむ。

こは則ち吾が却ける由なり」とまをす。天の日別命、兵を整へて窺ふに、中夜に比及びて大風四ゆ起り、波瀾を扇挙ぐ。光曜くこと日の如く、<sup>みなあき</sup>陸国も海も共朗けし。遂に波に乗りて東にゆきぬ。

このように、風波の激しい時に、あるいは光り輝きながら海よりやって来るというトヨタマビメの到来は、いずれも海神の靈威を發揮した形の、極めて主体的なものであり、先述した受動的なホワリのそれとは対照的である。また、このようなトヨタマビメの海からの移動表現は、平安期に朝廷で行われた『日本書紀』講義—「日本紀講筈」一の後の宴で、『日本書紀』に登場する神や人を題として詠まれた「日本紀竟宴和歌」において、天慶6年(943)、藤原俊房が「豊玉姫」題で詠んだ歌にも踏襲されている。

波をわけわが日のもとをたづねこしひじりのみよのおやにぞありける

とよたまひめいはく「われすではらめり。  
なみのたかゝらんひ、わたのへだにいでむ。  
うぶやをつくりてまで」

歌中の「波をわけ」という表現は、『日本書紀』正文の「直に風波を冒して」という表現を受けたものである。ここからも「風波を冒す」という表現が、トヨタマビメの海からの到来を示す、象徴的なものであることを示していよう。

## 2 異界との境界—「ハシ」と「サカ」

### 1、「龍宮」との境界—「橋」

このように海神の娘としての靈威をもって、異なった世界の間を移動するトヨタマビメであるが、これが、海幸山幸神話をモチーフにして院政期に成立したとされる『彦火々出見尊絵巻』では、その様相が一変する<sup>5</sup>。本絵巻では、ホワリは「弟みこ」、トヨタマビメは「(龍王の)女」と称され、「女」は、「橋」によって移動するという表現に、変容しているのである。

女、産月漸う近くなれば「やんごとなき尊の御子なり。此処にては産ませじ。元の国にて産ませ奉らむ」とて、橋を他の国の岸に造り出で、産屋はその浜になん造りたりける。

同様に、福井県小浜市の若狭彦・若狭姫神社の縁起とされる『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』でも、トヨタマビメの父である「龍王」が、「本国」にてヒメを出産させるべく、「橋」を「秋津嶋」に架けている<sup>6</sup>。

去ル程ニ豊玉姫只ナラヌ御座シケルカ、御産月漸近付給。龍王ノ曰ク「我ハ是レ親命ニ依テ此城ニ住メハ只他所ニ似タリ。日本ノ尊ハ親ナリト雖モ賓客也。惣ノ女ハ夫ニ髓フ習有リ。豈此國ニテ産ノ莫然ルベカラズ。速ヤカニ本国ニテ産セ奉ラン」トテ、橋ヲ秋津嶋ニ渡シ、即其濱ニ産所ヲ立テ給フ。

両絵巻における「橋」による移動という変化は、同様に、『古事記』『日本書紀』における「わたつみの宮」「海神」が、両絵巻では「龍宮」「龍王」に変化していることと通底するものである。すなわち平安期以降、仏教思想の普及により、經典などに描かれた「龍宮」「龍王」の概念が浸透し、「わたつみの宮」が「龍宮」と同一視されるようになってくる<sup>7</sup>。たとえば10世紀後半に編纂された『三宝絵』上巻・精進波羅蜜には、法華経をはじめとした仏典の影響による「龍宮」の描写が見られる<sup>8</sup>。また、さらに時代は下るが、『太平記』では、琵琶湖の湖底に龍宮があるとされ、勢多橋の下流に、龍神の通り道と称された橋が登場する<sup>9</sup>。このような「龍宮」像の形成が、『彦火々出見尊絵巻』等における「橋」描写の背景にあるといえよう。

### 2、古代における「ハシ」

一方、古代における「ハシ」は、川の兩岸を結ぶような水平方向のものだけではなく、上下方向をむすぶ「梯子」をも指すものであった。たとえば『古事記』において、イザナミ・イザナミが国生みを行う際に立つ場は、「天の浮橋」である。

故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して画きしかば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塩は、累り積りて島と成りき。是れ、淤能基呂島ぞ。

「天の浮橋」については、戦艦（新井白石『古史通』）、船（平田篤胤『古史伝』）、虹（アストン）など諸説あるが、少なくとも現在のような水平方向の「橋」のイメージとは異なるものである。

また『丹後国風土記』逸文では、丹後・天橋立の由来として、天と地を結ぶ「ハシ」が登場する。

与謝の郡。郡家の東北の隅の方に速石の里あり。この里の海に長大き前あり〔長さ一千二百二十九丈、広さ或る所は九丈以下、或る所は十丈以上二十丈以下なり〕先つ名をば天橋立といひ、後の名を久志浜といふ。然云ふは、国生みたまひし大神・伊射奈藝の命、天に通行はむとして橋を作り立てたまふ。故、天の橋立と云ふ。神の御寝坐す間に仆れ伏しぬ。仍ちくしびますことを怪しみたまひき。故、久志備の浜と云ふ。

このような天地を結ぶ「ハシ」は、『播磨国風土記』賀古郡・益気里条にも、「八十橋」というハシの起源譚として示されている。

この里に山あり。名を斗形山と曰ふ。石を以ちて斗と乎氣とを作り。故れ、斗形山と曰ふ。石の橋あり。伝へて云はく、上古の時に、この橋、天に至り、八十人衆、上り下り往来ひき。故れ、八十橋と曰ふ。

また『万葉集』巻13・3245では、月にあるという若返りの水、「変若水」を採取するための「天橋」が欲しい、と詠まれている。

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てる変若水 い取り来て 君に奉りて 変若ち得てしかも

さらに『日本書紀』神代・第九段一書第二には、国譲りをしたオホクニヌシに対し、その代償として「天日隅宮」を造営するほか、オホクニヌシが

「往来ひて海に遊ぶ具」として「高橋」「浮橋」「天鳥船」を、さらに天安河に「打橋」を作らせるといふ記述がある。

又汝（＝オホクニヌシ）が住むべき天日隅宮は、今し供造らむ。即ち千尋の栲縄を以ちて、結びて百八十紐とし、其の造宮の制は、柱は高く大く、板は広く厚くせむ。又田供佃らむ。又汝が往来ひて海に遊ぶ具の為に、高橋・浮橋と天鳥船も供造らむ。又天安河にも、打橋造らむ。

このうち「高橋」はハシゴ状のもの、「浮橋」は水中に浮かぶ橋、「打橋」は、川に掛け渡したのみの、取り外しの簡便な橋とされる。このように古代における「ハシ」には、様々な形状のものが存在し、かつ水平・垂直方向、いずれの場合にも用いられるものだった。さらにここで重要なのは、記紀・風土記・万葉集等に見られる「ハシ」において、異なった世界を結ぶ「ハシ」—異界との「境界」である「ハシ」—として登場するのは、「天の梯立」「天橋」「八十橋」など、いずれも天と地を結ぶ垂直方向のもので、水平方向の「ハシ」の例が少ないという点である。すなわち『彦火々出見尊絵巻』に見られたような、異なった世界をむすぶ「境界」として「橋」とは、様相が異なるのである。

では古代における境界は、どのように表現されるかという点、と、「ハシ」よりむしろ、「サカ」と表現される例が多いのである<sup>10</sup>。

### 3、古代における「境界」—「サカ」

たとえば海幸山幸神話で、出産する姿を見られたトヨタマビメが海へ戻る場面において、『古事記』では、海との境界は「海坂」（うなさか）と表現される<sup>11</sup>。

爾くして、豊玉毘売命、其の伺ひ見る事を知りて、心恥しと以為ひて、乃ち其の御子を生み置き、白さく「妾は、恒に海つ道を通りて往来はむと欲ひき。然れども、吾が形を伺ひ見つること、是甚作し」とまをして、即ち海坂を塞

ぎて、返り入りき。

また『万葉集』巻9・1740「水江浦島子を詠む歌」でも、浦島子が「常世」へ到る所が「海界（うなさか）」と表現される。

春の日の 霞める時に 墨吉の 岸に出で居て  
釣舟の とをらふ見れば 古の 事そ思ほゆる  
水江の 浦島子が 堅魚釣り 鯛釣り 矜り 七日まで  
家にも来ずて 海界を 過ぎて漕ぎ行く  
に 海神の 神の女に たまさかに い漕ぎ  
向ひ 相とぶらひ 言成りしかば かき結び  
常世に至り 海神の 神の宮の 内の隔の 妙なる殿に  
携はり 二人入り居て 老もせず 死にもせずして  
永き世に ありけるものを…  
海へ漁に出た「水江の浦島子」が、七日を過ぎても戻ってこず、「海界を過ぎて漕ぎ行く」先で「海神の神の女」と出会い、さらに「常世」にいたって「海神の神の宮」に行き着く、と表現されるように、古代における「サカ」は、「サカヒ（境）」「境界」としての意が強かったことは、『古事記』などの「黄泉ひら坂」の表現からも窺える。

爾くして、千引の石を其の黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、（イザナミとイザナキは）各対き立ちて、事戸を度す……其の黄泉つ坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞り坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。

また『出雲国風土記』出雲郡にも、「黄泉の坂」が登場する。

磯より西の方の窟戸は、高さ広さ各六尺許りなり。窟の内に穴在り。人入ること得ず、深き浅きを知らず。夢に此処の磯の窟の辺に至らば必ず死ぬ。故れ、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と号ふ。

夢の中でこの窟にやってきた者は、必ず死ぬとされることより、「俗人」は「窟＝黄泉の坂」、「窟内の穴＝黄泉の穴」と称している、という記事である。ここで「窟＝坂」と呼ばれることから、「サカ（坂）」が、必ずしも傾斜状の地形をあらわ

すのではなく、境（境界）を示す言葉であることがわかる。このように古代において、「海」をはじめとする異界との境界は、「サカ」と表現されることが多く、これは「橋」が境界を示すシンボリック的存在となる平安時代以降と、異なるものである。そして境界をしめす表象が、「サカ」から「ハシ」に変化した背景には、先述した仏教思想の影響のほか、「ハシ（橋）」の建築物としての表象性の変遷も、考えられよう。

すなわち古代における橋は、『万葉集』などを見ると、先述した「打橋」や、河中の飛び石を利用した「石橋」など、丸太や石などの自然物を利用したものや、「継橋」という板を継ぎ渡したものなど、簡易なものが多く詠まれている。『日本書紀』における壬申の乱の記述では、菟道橋や瀬田橋での戦乱において、それらの橋を寸断したことなどが見えるが、架橋事業が史料で確認されるようになるのは、7～8世紀にかけて、道昭（『続日本紀』）あるいは道登（『日本霊異記』上12縁、宇治橋断碑）による宇治橋建設や、行基による架橋事業（『続日本紀』天平21年2月丁酉条・行基卒伝）など、民間僧によるものである。一方、国家主導のものとしては、恭仁京造営に伴う木津川の架橋事業など、8世紀半ば以降、大規模なものが行われるようになっていく<sup>12</sup>。このような本格的な橋造営は、建造物としての「橋」自体が、「境界」の表象として認識されることに繋がったであろう。

このように「サカ」から「ハシ」へ、という「境界」の表象の変遷は、仏教思想の移入、建築物としての「橋」の存在感など、様々な要素が絡み合った結果といえよう。

## おわりに

以上、海幸山幸神話を取り上げ、海という異界との移動—交通に関する表現に着目して、考察してきた。中でもトヨタマビメの海からの移動表現

において、『古事記』『日本書紀』では、神の靈威を示した表現だったものが、時代が下って平安末期に制作された『彦火々出見尊絵巻』では、「橋」が、異界を結ぶ手段として示されるようになった。その背景には、仏教思想の普及による「わたつみの宮」から「龍宮」、「海神」から「龍神」へ、という異界概念の変容や、「境界」を示す表象—「サカ」から「ハシ」へ—の変遷、建造物としての「橋」の象徴性など、複数の要因が考えられた。

「異界」は、本稿の「はじめに」で示した定義のごとく、時間・空間において、日常の世界とは異なるものとされる。本稿では「時間」については触れられなかったが、「空間」「時間」という観点から、比較神話学・文学においても重要な視点であることは、本シンポジウムでも議論されたものである。これらについては、機会を改めて考察したい。

注

- 1 本稿は、拙稿『『古事記』海幸山幸神話—「海原」という世界』（鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店 2016）と重複する部分がある。
  - 2 『古事記』『日本書紀』各話の相違について論じたものは数多い。一例として小谷博泰「古事記の成立と日本書紀各書—海幸山幸神話の場合—」（『甲南大学紀要（文学部）』第107号 1998.3）、榎本福寿「海幸山幸をめぐる所伝の展開—日本書紀〔本伝〕から一書、そして古事記へ」（『京都語文』第10号 2003.11）など。
  - 3 大久間喜一郎・乾克己編『上代説話事典』（雄山閣出版 1993）。
  - 4 海宮への交通については、アンダソヴァ・マラル「古事記の他界観とシャーマニズム—交渉手段の考察を通して—」（『佛敎大学大学院紀要 文学研究科編』第37号 2009.3）、冠野真依「移動する主人公の系譜に繋がれる山幸彦」（『国文学研究ノート』第53号 2014.10）など参照。
  - 5 同絵巻については、むしゃこうじ みのる「『彦火々出見尊絵巻』について」（『日本文学』第19巻第7号 1970.7）、浜口俊裕「彦火々出見尊絵巻』の海幸山幸譚について」（『東洋研究』第113号 1994.11）、飯村高広「神話の図像化とテキスト—（海幸山幸神話）享受の方法—」（『記紀万葉論攷』おうふう 2000）、永井久美子「弟の王権：『彦火々出見尊絵巻』制作背景論おぼえがき」（『比較文学・文化論集』第18号 2001.3）など参照。なお当該場面に関しては、絵と詞書に齟齬があることが指摘されているが（五月女晴恵「『彦火々出見尊絵巻』の制作動機に関する一考察：絵巻の基となった説話と仏画の図様との共通性に注目しながら」（『仏教美術』第334号 2014.5）、本稿の論点とは異なるため、ここでは取り上げなかった。合わせて参照願いたい。
  - 6 同絵巻に関しては、小松茂美編『続日本の絵巻 19 彦火々出見尊絵巻・浦島明神絵巻』（中央公論社 1992）、竹中敬一『若狭の海幸山幸物語』（風媒社 2014）など参照。
  - 7 「龍宮」の表象については、小峯和明「龍宮をさぐる—異界の形象—」（国文学研究資料館編『アメリカに渡った物語絵—絵巻・屏風—絵本』ぺりかん社 2013）、さらに御伽草子や、近世以降の展開については、恋田知子「お伽草子が描く海」（鈴木健一編『海の文学史』三弥井書店 2016）、関原彩「竜宮城はどこにある？」（同上 2016）など参照。
  - 8 金沢英之「平安期における竜宮—『三宝絵』精進波羅蜜の例話を中心に」（『比較文化論叢』第21号 2008）。
  - 9 網野善彦・大西廣・佐竹昭宏『いまは昔 むかしは今 天の橋地の橋』（福音館書店 1991）。橋の記述については、本書に負うところが大きい。
  - 10 三浦佑之「境界としての〈坂〉」（同『神話と歴史叙述』若草書房 1998）。
  - 11 山近久美子「交通に関わる祭祀」（館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報 3 遺跡と技術』吉川弘文館 2016）も、海という異界への境界を「サカ」とする点、論じている。なおトヨタマビメが海に帰る場面について、『日本書紀』一書第四では、「海坂」という表現は見られないものの、この出来事が「海陸相通はざる縁」、すなわち海・陸が異なる世界となった起源譚として示されている。豊玉姫、大きに恨みて曰さく「吾が言をみたまはずして、我に屈辱せつ。故、今より以往、妾が奴婢、君の処に至らば、復な放還したまひそ。君の奴婢、妾が処に至らば、また復還さじ」とまをす。遂に真床覆袋と草とを以ちて、其の児を囊みて波瀾に置き、即ち海に入りて去ぬ。此、海陸相通はざる縁なり。
- また『日本書紀』正文では、トヨタマビメが「如し我に辱せざらましかば、海陸相通はしめ、永に隔絶つること無からましを。今し既に辱せつ。何を以ちてか親昵しき情を結ばむ」とし、「草を以ちて児を囊み海辺に棄て、海途を閉ぢて徑に去ぬ」

と言って海に戻っている。ここにも、自らの力によって海と陸を隔てるという、トヨタマビメの主体的な力が示されている。

- 12 賀世山の東の河の橋造営に携わった優婆塞705名を得度させた記事（『続日本紀』天平13年10月癸巳条）、恭仁京に大橋を作らせた記事（同14年8月乙酉条）など。古代の橋・架橋工事については、松村博「渡河施設」（館野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報3 遺跡と技術』吉川弘文館 2016）を参考にした。

#### 【使用テキスト】

但し、一部表記を改めたところもある

- ・『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』…新編日本古典文学全集（小学館）
- ・『彦火々出見尊絵巻』…小松茂美編『続日本の絵巻19 彦火々出見尊絵巻・浦島明神絵巻』（中央公論社 1992）
- ・『若狭彦若狭姫大明神秘密縁起』…小浜市編纂委員会編『小浜市史社寺文書編』（小浜市 1976）